

機械をいじるだけなんてつまらない

特別講義付き実践超音波検査ハンズオンセミナー

超音波検査はダーモスコピーと並んで、皮膚科医にとって習得すべき画像診断技術の1つである。ダーモスコピーが平面構造を主として捉えるのに対して、超音波検査は断面を捉える検査である。ダーモスコピーは簡便な機器を使用し肉眼所見に近く、皮膚科医にとってより身近に感じる。一方、超音波検査は無骨な機械を使用し、肉眼所見とは似ても似つかぬ白黒の世界を描き出すため、どうしても敬遠されがちである。しかし、最初に記したように、超音波検査は断面を捉える検査で、断面とはまさに私たち皮膚科医がプレパラートで捉えている世界である。病理所見を理解していれば、その応用で超音波検査は理解できるのである。

今回、超音波検査を語る上では欠くことできない奈良県立医科大学正畠千夏先生に「皮下腫瘍」を、国立がんセンター中央病院希少がんセンター緒方大先生に「悪性腫瘍」を、墨東病院皮膚科沢田泰之先生に「炎症性疾患・循環障害」の超音波検査について、少人数で講義をしていただきます。学会場ではなかなか聞けなかったことも聞くことができる貴重な機会になると考えております。

同時に、ボランティアの患者様に御協力いただき、より実践的な超音波検査の実習ができるようにしたいと考えています。

数少ない貴重な機会になると思います。より多くの先生のご応募をお待ちしております。

ハンズオンセミナー 1

11月18日(土) 9:30~11:30 HS会場1 42F 高尾

『機械をいじるだけなんてつまらない 特別講義付き実践超音波検査ハンズオンセミナー』

オーガナイザー：沢田 泰之（都立墨東病院）

チューター：正畠 千夏（奈良県立医大）

緒方 大（国立がん研究センター）

開催日時：11月18日(土) 9:30~11:30

対象：エコー初心者

抄録

皮下腫瘍の超音波検査

正畠 千夏

奈良県立医大

皮下腫瘍の中で数の多い粉瘤や脂肪腫、石灰化上皮腫などは特異的な所見を認め超音波検査で診断が容易である。その他の皮下腫瘍も一度の超音波検査で診断に至らなくても、良性として経過観察してよいものか、悪性を否定できない所見であるかということが重要である。日常よく遭遇する皮下腫瘍やその鑑別疾患の超音波所見を供覧し、皮下腫瘍の超音波診断のすすめ方を解説する。

皮膚悪性腫瘍の超音波検査

緒方 大

国立がん研究センター

皮膚悪性腫瘍における超音波検査として、原発巣における病変境界部の評価、深達度評価および血流評価などについて解説する。また、転移の有無が重要となるリンパ節の観察法についても言及したいと考えている。

皮膚炎症性疾患の超音波検査

沢田 泰之

都立墨東病院

超音波検査は断面を診る検査である。通常の表在型超音波検査（12-18MHz）ではプレパラートをそのままみた状態、高周波超音波検査（20MHz以上）は40倍程度の倍率でみた状態を白黒したものと思えば良い。細胞、浮腫、脂肪組織、垂直方向の線維組織は低エコーに、角化、石灰化、平行方向の線維は高エコーになる。炎症は血流増加と浮腫捉える。以上でプレパラート構築するのが診断方法である。今回、超音波画像と組織を比較して説明する。

協力：GEヘルスケア・ジャパン株式会社